

シンノウヤシ *Phoenix roebelenii* O'Brien の和名の由来 (原田幸雄)

Yukio HARADA: On the Original Article on “Shin'nô-yashi”, Japanese Name for Miniature Date *Phoenix roebelenii* O'Brien (*Arecaceae*)

Summary: The name “Shin'nô-yashi”, which means Imperial Prince palm in Japanese, was proposed for a miniature date, *Phoenix roebelenii* O'Brien (*Arecaceae*) by N. Matsuzaki in a commercial magazine “Jissai Engei” [Practical Horticulture] in 1930. However, the original meaning of the name is not properly understood even now probably because the original article has been overlooked by most authors. Matsuzaki (1930) named the palm in memory of the Imperial Prince Takaoka (799?–865?), remembering Takaoka's hard and long travel to India to study Buddhism, via China and Laos where the palm is growing wild in the mountains. Takaoka died on the way to the Malay Peninsula.

シンノウヤシ *Phoenix roebelenii* O'Brien (ヤシ科) が知られるようになったのには次のような経緯がある。フィリピンなどで植物を採集したスイス人 C. Roebelin がラオスのメコン川沿岸でこのヤシを発見し、その生品をシンガポールから英国に送付した。これを手に入れた O'Brien が 1889 年に新種 *Phoenix roebelenii* として記載した (松崎 1930, 上原 1961)。英名は *Roebelin date (palm)* あるいは *miniature date (palm)* (Uhl and Dransfield 1987) とされ、また中国では軟葉刺葵の名が付されている (中国科学院北京植物研究所 1976)。

シンノウヤシが日本に入ったのは 1921 (大正 10) 年で、この時東京都八丈町中ノ郷に雌雄一対の株が導入され、それらをもとに種子による苗の増殖がはかられたという (佐々木 1983, 上原 1961)。園芸店では形容語 *roebelenii* の読みを簡略化したロベの名で扱われていることが多い。わが国では八丈島が特産地となっており、旧東京都農業試験場八丈試験地には立派なロベの並木がみられる (Fig. 1)。

この有用なヤシの評価はすでに定着しおおかたの園芸書に登載されているが、シンノウヤシの和名の由来についての解説はほとんどみられない

(天野 1982, 塚本 1994)。それは和名の出典が見逃されてきたことが原因と考えられる。「新牧野日本植物図鑑」(大橋ほか 2008) では本種が新たに登載され、和名の由来について、「シンノウヤシは親王椰子のことで、おそらくこの属の中では小形で葉も軟らかく、全体が優美なために親王にたとえたものであろう」と書かれている。しかし、これは必ずしも十分な理解とはいえない。

親王椰子の名は松崎 (1930) によって「実際園芸」誌上に発表された。氏は当時東京帝国大学理学部付属小石川植物園の園芸主任であった。命名の要点を原文から抄録すると、「・・・其原産地はシャムのラオス州である。・・・高岳 (たかおか) 親王 (平城天皇第二皇子) が仏法探求の為め旅行中同地方で虎害に遭ひ給ふと云う地にてビルマ人にも知られて居る。・・・予は敢て此法親王の壯途を偲ぶ為めに此椰子を呼ぶに仮りに親王 (しんのう) 椰子とし姫棗 (ひめなつめ) 椰子を其別名としたいと思う。・・・」とある。つまり、親王は単に優美さの象徴として用いられたのではなく、具体的に高岳親王を偲んで命名したことが分る。このことは、「フェニックス・ロベレニー はばたく不死鳥—八丈島におけるロベレニ



Fig. 1. Avenue of *Phoenix roebelenii* (Hachijô Branch, Tokyo Metropolitan Agricultural Experiment Station, Hachijô Island, Tokyo Pref., Japan). Photo by Y. Harada in February 1986.

一の歴史」(佐々木 1983)中にも再録されている。筆者は1986年八丈島を訪問しこのヤシに出会いました和名の由来を知って小記事を書いた(原田1986, 1987)。しかし発表誌はローカルな会報で読者も限られているので、改めてここに報告することにした。

最後に、文献のご教示を賜った元東京都農業試験場長 飯嶋 勉氏に感謝する。

引用文献

- 天野鉄夫 1982. 琉球列島有用樹木誌. pp. 197-198. 同書刊行会, 那覇.
- 中国科学院北京植物研究所 1976. 中国高等植物図鑑 第五冊. p. 351. 科学出版社, 北京.
- 原田幸雄 1986. ロベ (シンノウヤシ) について. 津軽植物 23(12): 2241-2242.
- 原田幸雄 1987. ロベ (シンノウヤシ) 追記. 津軽植物 24(2): 2269-2270.
- 松崎直枝 1930. 花卉の分類と栽培 連載四. 実際園芸 8(6): 731-736.
- 大橋広好, 邑田 仁, 岩槻邦男 2008. 新牧野植物図鑑. p. 976. 北隆館, 東京.
- 佐々木 度 1983. フェニックス・ロベレニー はばたく不死鳥—八丈島におけるロベレニーの歴史. 11 pp. 八丈島ロベ実行委員会.
- 塚本洋太郎 1994. 園芸植物大事典 2 p. 2557. 小学館, 東京.
- 上原敬二 1961. 樹木大図説 III. pp. 1151-1152. 有明書房, 東京.
- Uhl N.W. and Dransfield J. 1987. Genera Palmarum. pp. 214-217. Allen Press, Lawrence.

(036-) 弘前市 ()

E-mail: Yukio.Harada@me5.seikyou ne.jp)

植物研究雑誌 85: 52-58 (2010)

薬用植物ヨロイグサ (セリ科) の学名 (大橋広好^a, 寺林 進^b, 大橋一晶^c) Hiroyoshi OHASHI^a, Susumu TERABAYASHI^b and Kazuaki OHASHI^c: The Correct Authors of *Angelica dahurica* (Umbelliferae)

Summary: *Angelica dahurica* is the original plant of an important crude drug in East Asia, e.g., “Byakushi, Angelica Dahurica Root, Angelicae Dahuricae Radix” in The Japanese Pharmacopoeia 15th edition (2006). The scientific name of the plant has, however, been variously attributed to “Benth. & Hook.”, “(Fisch.) Benth. & Hook. f.”, “(Fisch. ex Hoffm.) Benth. & Hook. f. ex Franch. & Sav.”, etc. The basionym, *Callisace dahurica*, was validly published by Hoffmann in the legend of figure 18 in Gen. Pl. Umbell. ed. 2., 1(2): 206 (1816) as revised recently (June 2009) in IPNI (<http://www.ipni.org/index.html>). *Angelica dahurica* was validly published by Franchet and Savatier in 1873, and they ascribed the name to “Benth. & Hook. f.”, although Bentham and Hooker f. (1865) did not use the epithet “*dahurica*” in *Angelica* in their work. The correct author citation of the name and the basionym with their original publications should be *Angelica dahurica* (Hoffm.) Franch. & Sav., Enum. Pl. Jap. 1(1): 187 (1873) and *Callisace dahurica* Hoffm., Gen. Pl. Umbell., ed. 2.

1(2): 206, tab. tituli fig. 18 (1816).

ヨロイグサの学名 *Angelica dahurica* にさまざまな著者名が使われている。ヨロイグサの学名は安定しているにもかかわらず著者名だけが混乱している。種や種内分類群の学名では学名と著者名は一体として表記されるので、この状態は広い意味で学名が混乱していることを示している。本論文では、*Angelica dahurica* とその基礎異名 *Callisace dahurica* との初発表文 protologue (国際植物命名規約 8A.4. 脚注; 大橋・永益 2007) に遡ってこれらの学名を正式に発表した著者を特定することで、ヨロイグサの学名の安定を図るよう試みた。

1. ヨロイグサ学名の混乱

ヨロイグサは「第十五改正日本薬局方」(厚生労働省 2006)に「ビャクシ, *Angelica Dahurica* Root, *Angelicae Dahuricae* Radix, 白芷」とし